

### 韓国系民族学校に在籍する JSL 児童を取り巻く学習環境 —大阪 K 小学校に在籍する JSL 児童とその学習環境を中心に—

余銅基（九州大学大学院生）

韓国系民族学校は一条校であるが、日本語指導が必要な外国人児童（以下 JSL 児童）の受け入れ体制やその指導においては独自の路線を歩んできたことから、JSL 児童教育機関としても注目に値する。しかし、韓国系民族学校の長年の JSL 児童受け入れ実績と JSL 児童に対しての学習環境の実態はあまり知られていない。本研究では韓国系民族学校の学習環境を JSL 児童の日本語習得に焦点を当て調査し、JSL 児童の受け入れ体制づくりに示唆を得ることを目的とする。

調査は韓国系民族学校である大阪 K 小学校で行い、授業観察・校内観察・教員へのインタビューで JSL 児童や学習環境に関するデータを収集した。その結果、日本の公立小学校と比較して特異点とみられる以下のような特徴が見られた。

- 小学校の各クラスに少なくとも数人の JSL 児童が在籍しており、より日本在住期間の長い児童が JSL 児童の学習のサポートをしている。
- 韓国の「国語」教科書を使った韓国語の授業（JSL 児童における母語教育）が教育課程（時間割）の中に週当たり時数で4～5時間入っており、韓国から派遣された韓国人教員により韓国語で行われている。
- 教科学習は日本語により日本のカリキュラムに沿って行われているが、教科学習以外では学校内に JSL 児童の母語（韓国語）環境がある。挨拶言葉・時間割・学内案内などに韓国語が使われ、教員は母語話者ではなくても韓国語運用能力がある。
- 2016年から小学校高学年 JSL 児童に対する日本語指導が始まったが、取り出し授業は行わず、放課後の時間を利用して日本語語彙・文法の個別指導をしている。

大阪 K 小学校に在籍する JSL 児童は、来日後数年（2年以内）で日本語での教科学習に参加できているとみなされることから、JSL 児童に対する教育に一定の評価ができると考えられる。日本の公立学校とは異なった学習環境を JSL 児童に提供している韓国系民族学校の事例から、JSL 児童受け入れ体制を検討するうえでの示唆が得られると考えられる。